

掛川市岡津横穴墳群 (A 群)

発掘調査概報

— 東名高速道路建設に伴う発掘調査 —

1966

掛川市教育委員会



掛川市岡津横穴墳群(A群)

発掘調査概報

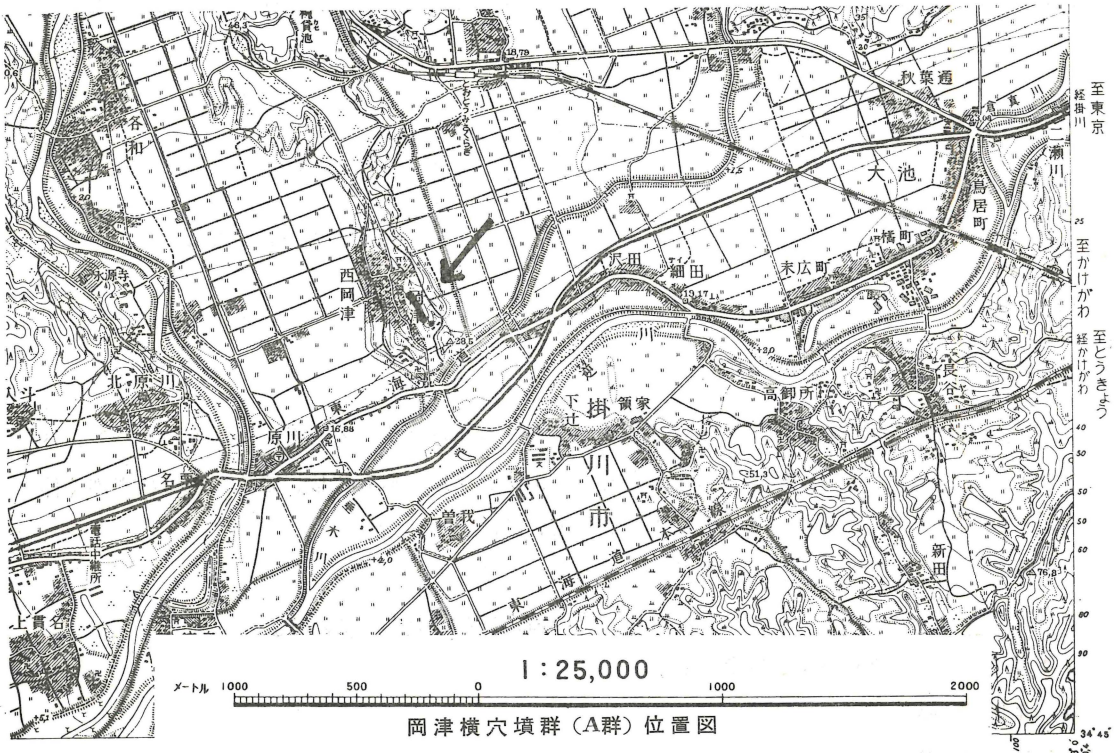
— 東名高速道路建設に伴う発掘調査 —

掛川市岡津横穴墳群 (A群)

発掘調査概報

—東名高速道路建設に伴う発掘調査—

1. 所在地 掛川市岡津字大治ヶ井戸 433 番地
" " 字東谷田 430 番地・429 番地
2. 調査期間 昭和41年12月27日より
昭和42年1月11日まで
3. 調査主体 日本道路公団
4. 調査者 静岡県教育委員会・掛川市教育委員会
5. 発掘担当者 平野 和男 (執筆者同左)
6. 参加者 向坂 鋼二・山村 宏・大谷 純仁・平野 吾郎・増井 義昭・外山
和夫・柴田 稔・島津 義昭・金盛 典夫・長沢 陽子・佐野五十三
長久 淳子・安本 収・太田 裕治



調査の概要

I. 経過

本横穴墳群の調査は、東名高速道路建設に伴う採土工事中に発見され緊急調査を実施したものである。

道路敷地以外の採土予定地域については、文化財関係に関する限り連絡は全くなく、発見された時には、すでに自然地形は完全に失れ、横穴墳も本工事のため破壊されて発見された。

しかも、調査の実施にあたっては、種々の悪条件が重なり、年末、年始にかけて調査を続行せざるを得ない状態であった。

こうした悪条件のなかで、調査に協力いただいた関係者各位に深謝したい。

調査の経過は、12月25日頃、天井部の一部を、ブルドーザーによって削られた横穴墳1基が発見された。27日より緊急に調査に移ったが、同地域には、他にも横穴墳の存在することが予想されたので、同地域の精査を実施した。

最初に発見されたのは、4号墳である。(整理上、北位のものより1～8号横穴墳と改称した)

4号墳の南より、7・8号墳が発見され、さらに北側より、2・3号墳が発見された。引き続きボーリング探索の結果、4号墳と7号墳の中間の位置に、5・6号墳が発見され、2号墳の北、丘陵の奥まった地点に、1号墳が発見された。本地域には8基の横穴墳が存在することが明らかになった。

なお、本地域の南端部で採土工事中2基の横穴墳が発見された。この2基の詳細については、この地域で存在が確認された16基の横穴墳(B支群)の調査報告書に譲り、本報告書では調査表のみ掲げ省略する。

発掘調査は、原則として羨道閉塞の計測を行い、続いて横穴墳内部の調査にうつった。

II. 概要

A 地形

本横穴群は、岡津原丘陵の東南端部に形成された小規模な開折谷の西斜面に位置している。さらに、遺跡附近の地形について精述するならば、開折谷が東西に分岐し、さらに台地の奥深く伸びているため中央に半島状の小丘陵が形成されている。

本横穴群はこの丘陵の西斜面に構築されたものである。

なお、本丘陵の南端部から東斜面にかけて別の横穴群が発見されている。

本横穴群を岡津A横穴群と呼称する。

B 遺跡概要

岡津A横穴群は8基の横穴墳によって構成されている。各横穴墳はすべて新たに発見されたも

のであり、発見された順序に1号墳～8号墳と仮称して来たが、所在する位置が不整で煩雑にわたるので統一し、最奥部すなわち北位のものより岡津A群第1号横穴墳とし、以下第8号横穴墳と呼称する。これに従って記述を進めよう。

第1号横穴墳

本墳は、ブルドーザーによって削られた土砂によって埋没していたが、丘陵を開墾した部分はずかには認められたので探索の結果発見されたものである。

前庭部は丘陵斜面に向かってほぼ長方形に奥行4m・巾4mほど開墾し前庭部が設けられている。

前庭部は工事によって埋没する以前に東側の斜面より流出した土壌が前庭を埋め東端で高さ1.8m、中央付近ではわずかに10cm前後の堆積しか示さず、急傾斜な堆積土が認められた。

前庭部の堆積土を除土した結果、前庭部の規模は奥行4m・巾は上端4.2m・下端2.9mあり、周囲の壁面は約15度前後の傾斜をもって整形されている。前庭の床面は平坦に削られ約15度の傾斜をもって羨道に向ってゆるやかに登っている。

本墳は前庭正面壁中央部に構築されている。

羨道閉塞に使用されたと考えられる円礫は取除かれ羨道の左右に自然堆積土層の上に不規模に積み重ねられた状態で発見された。

閉塞石の外れた時期については不明であるが、既に開口されていたことは明らかである。

本墳は羨道閉塞をのぞいてはきわめてよく原状が遺存されていた。

羨道は玄室に向ってやや開き、羨道巾は最も狭い部分で67cm・最大巾90cm・高さ86cmを測る。羨道床には玄室との境で巾6cm前後の狭く浅い溝が前庭に向って次第に巾を広め羨道入口で扇状にひろがり65cmを測る。これは玄室からの排水溝としての施設であろう。

玄室は奥行よりも巾が広く不整形であるが、強いて言えば長方形に近く、その西端に羨道がつけられた如き形状である。

玄室の規模は奥行130cm・巾194cm・高さ116cmあり、天井部はドーム状を呈し、断面形はアーチ状をなす。

玄室内部床面に羨道に向って巾40cm前後の間で、長径30～20cm前後の大形礫を3～4段積み重ねた石列が2条発見された。

副葬品は古く開口している割によく遺存し、その配置状態を原位置を動いていないと推考される。

出土状態は羨道西壁沿いに須恵器、坏身3・坏蓋1・平瓶1が出土し、玄室内では入口西側より盤1・坏身1・坏蓋1・平瓶2、東側よりは高坏2・甗1・坏身2が出土した。なお前庭床面より土師器破片1括が出土しているが器種不明であり、その他の副葬品は発見されていない。

第2号横穴墳

古くから開口し、横穴内部は攪乱されていたものが、工事により再度、埋没したもので羨道・

玄室ともに床面が露出していた。

羨道部は天井が大部分崩壊している。僅に現存している部分で天井高 130 cm・巾 130 cm・長さ 160 cm を測る。

玄室は巾 240 cm・奥行 230 cm・天井高 148 cm あり、天井部はドーム状をなしている。

玄室の平面形はほぼ正方形に近く、羨道から玄室までの平面形はいわゆる羽子板状を呈している。

副葬品については全く発見できなかった。

第3号横穴墳

第2号横穴墳の南に隣接して構築されている。未開口であったが、自然の崩壊によって天井部の大半が崩れている。

全体的な平面形は羨道と玄室の区別が明らかでなく、奥がわずかに拡った袋状をなし、奥壁より 60 cm 前後まで扁平な礫が敷きならべられている。この部分が玄室に相当するものであろう。

又、奥壁より約 100 cm 附近より入口に向かって巾 6 cm ほどの浅い排水溝の施設があり羨道に相当する部分であろう。

規模は全長 190 cm・巾は最も狭い入口で 50 cm・玄室の最大巾 80 cm・現存する天井高 70 cm ある。小規模な横穴墳である。

副葬品については全く発見できなかった。

第4号横穴墳

本A群横穴墳の発見の端緒となったもので、本墳が最初に発見された。

本墳はA群の所在する丘陵の中央に位置している。丘陵を巾 180 cm 前後ほぼ方形に開鑿し前庭部がつくられ前庭正面壁に構築されている。未開口で羨道には円礫積の閉塞が遺存していた。閉塞は下段で 100 cm ほどの範囲に長径 30 cm 前後の大形礫をならべ、その上に同様の礫が五、六段高さにして 70 cm ほど山積されている。

羨道は玄室に向かってやや巾を拡げ、羨道入口巾 55 cm・玄室境巾 95 cm・長さ 210 cm・天井高 100 cm あり、道直部は玄室に向かって約 15 度の傾斜をもっている。

羨道より玄室に移る部分で約 40 cm ほど急激に段をなして高い位置に玄室が構築されている。

羨道部には浅い排水溝(巾 6 cm・深さ 6 cm)が羨道を通り、北側に曲りながら前庭部まで通じている。

本墳は平面形、構造上から羨道と玄室の区別が明確である。玄室は隅丸方形をなし玄室巾 200 cm・奥行 200 cm・天井高 100 cm の規模をもっている。天井部はドーム状、断面形はアーチ状を呈する。

玄室内には奥壁より約 100 cm ほどの範囲に径 10 cm 前後の扁平な小礫が密に敷きつめられた敷石の施設が認められる。その前方には長径 30 cm をこゆる大形礫が羨道境までならべられ

ている。

玄室中央部附近の奥壁沿いの地点で人骨の頭蓋骨及び歯が散布した状態で発見された。その他副葬品としては人骨附近より直刀2口・刀子1口、羨道内に鉄鏃1括、須恵器坏身・蓋それぞれ5、平瓶1が埋葬時の位置をはなはだしく攪乱されていない状態で発見された。

第5号横穴墳

第4号横穴墳の南側に隣接して位置している。

前庭部の大半は破壊されているが、閉塞は遺存している。閉塞石の1部は崩壊して前庭までは転落していた。

平面形は羨道・玄室の区別が定かでなく、袋状をしている。規模は全長240cm・天井高85cmで、羨道・玄室ともに変わらず、巾は羨道80cm・玄室120cmを測る。

副葬品は全く発見されていない。

第6号横穴墳

位置は第5号墳の南に位置し、第4、5号墳の前庭部として開鑿された壁面に構築されている。他の横穴墳と異なり、前庭部の床面より約40cmほど高い壁に直接穿れている。前庭は勿論、羨道・玄室の区別は全く認められない。入口附近が55cmと巾も最も広く、天井も40cmと高い。しかし奥に行くに従って巾16cm・高さ10cmとなっている。

入口には円礫による閉塞が遺存していた。出土品は全く発見できなかった。

きわめて小規模なもので構造上も特別なものである。

第7号横穴墳

本墳も前庭に相当する部分を工事によって破壊されている。横穴は前庭より50cm高い位置に構築されている。

閉塞は扁平な礫を積み重ねたものが6段ほど遺存している。

全長220cmの小規模なもので羨道・玄室の区別は明確でない袋状をなしている。横穴の巾は閉塞部で85cm・奥壁巾110cm・天井高は全体的に変わらず85cmある。玄室中央部には大形礫が約10個敷かれている。

副葬品は閉塞内側の北壁沿いに須恵器高坏2、土師器坏4が出土している。

第8号横穴墳

本墳も羨道閉塞までブルドーザーによって削られて発見された。

閉塞は大形礫が積れていたものらしく1部閉塞円礫が残存していた。

羨道は遺存している全長320cm・巾140cm・天井高110cmあり、断面形はアーチ状を呈している。

玄室は羨道に対してやや北に歪んだ状態に掘込れている。規模は奥行310cm・巾240cm・天井高180cmあり、アーチ状を呈している。平面形はほぼ長方形を呈している。

玄室部の床面は奥壁より120cmのところまで10cmほど段をなして高くなっている。この部

分に北周壁沿いに礫が5個、南壁沿いに3個の礫が遺存していた。

なお、開口した時内部が攪乱され副葬品が持ち出されているが、須恵器 坏身4・坏蓋2・平瓶2が出土している。

C 出土遺物

出土遺物はこれを一覧表にして示せば次の通りである。

品名		横穴名							
		A 1 群号	2 号	3 号	4 号	5 号	6 号	7 号	8 号
武器類	直 刀				2				
	刀 子				1				
	鉄 鏃				1 括				
須恵器	高 坏	2						2	
	蓋 坏	8			10				6
	平 瓶	3			1				2
	甗	1							
	盤	1							
土師器	坏							4	
	埴								
	鉢								
	盤	1							
人骨				1 体					

III. 考 察

構造群について 本群の各横穴の構造をみると、第8号墳を除いては小規模なものが多く、羨道・玄室の区別の明確でないものが多い。さらに第2、3、5、4、5、6号墳を除いてはいわゆる前庭部を共有して構築されるものが少なく、1基1基が独立して構築されている点も同地方の横穴群とは異なる点が多い。

出土品について 前表の一覧表でも明かな様に本群の各横穴墳ともに副葬品がきわめて少なく、且つ武器、武具類の副葬例がすくなく、須恵器のみ出土している。

年代について 構築された年代については第8号横穴墳を除いては須恵器編年上、第Ⅲ後半の時期のものが特に多い。構造上から観察すれば、第8号墳はかなり古い形式を呈しながら実際に本墳から出土した須恵器は直口の高台付の坏・蓋である。これは前時期に構築されたものが、第5形式の時期に重葬されていることが推考される。

なお、精細の調査結果については、出土品実測図等をさらに検討のうえ後述したい。

〔付〕

B支群（A-6号墳 A-7号墳）調査表

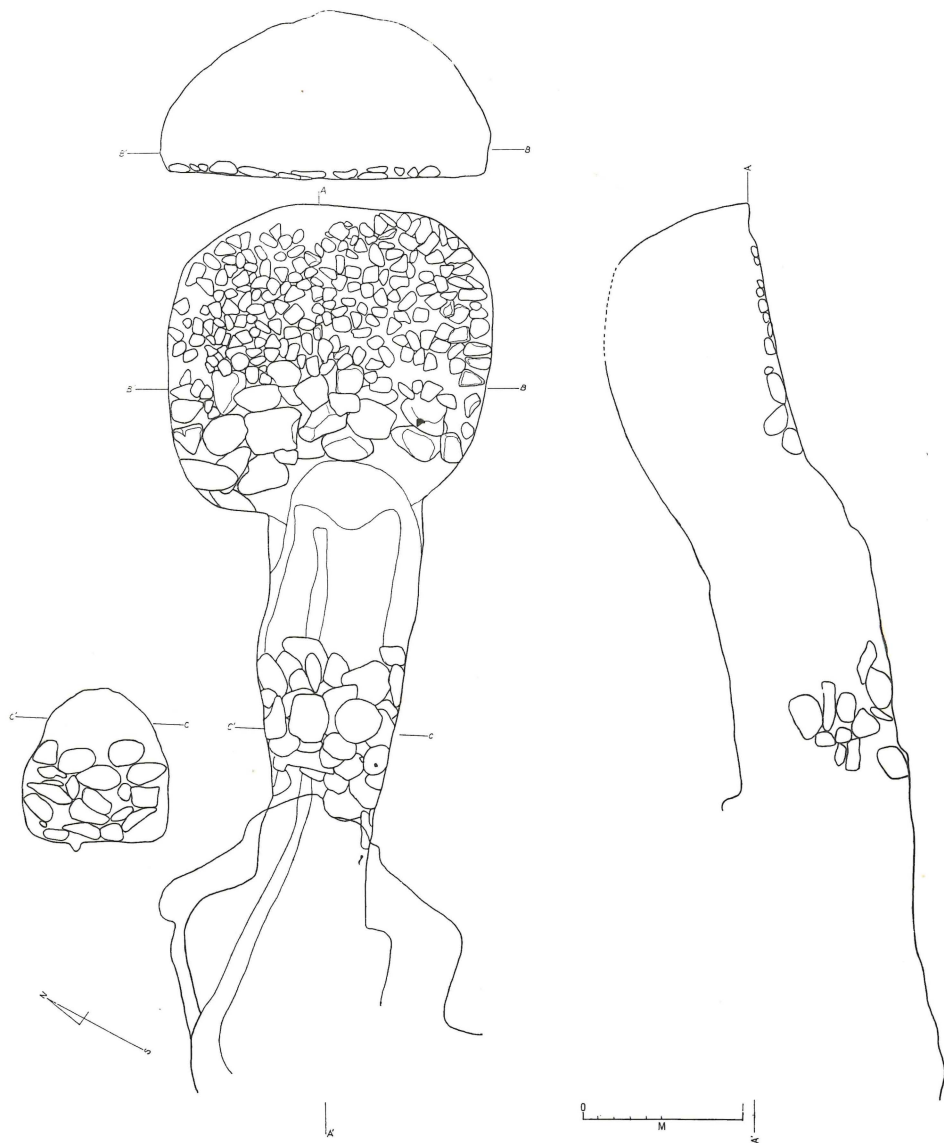
	A-6号墳	A-7号墳
玄室長	293 cm	263 cm
玄室巾	238~180 cm	140 cm~107 cm
玄室高	(140 cm~150 cm)	(120)
羨道長	255 cm	230 cm
羨道巾	110 cm~80 cm	96 cm~79 cm
羨道高	140 cm	?
全長	548 cm	493 cm
棺座長	134 cm	115 cm
棺座巾	245 cm	134 cm
棺座高	12 cm	5 cm~8 cm
方位	N-31-E	N-18-E
玄室プラン	隅丸方形	隅丸長方退化形
出土品	須恵器（高坏3・平瓶3・坏身3・ 坏蓋1・長頸埴2） 土師器（坏1・台付鉢1） 武器（圭頭大刀柄頭1・鏝1・そ の他附属品・鉄鏃・刀子） 馬具（轡一式・その他附属品） その他（鈴1）	須恵器（広口埴1・坏2・瓶1） 土師器（坏片1個分） 刀子2

（ ）内は推定値

作表：大谷 純仁



掛川市岡津A群第1号横穴墳
第1図



掛川市岡津 A 群第 4 号横穴墳
第 2 図

図版 1 岡津横穴墳群の調査 その 1



A A群全景



B A群1号穴遺物出土状態

図版 2 岡津横穴墳群の調査 その 2



A A群4号穴玄室



B A群5号穴閉塞部

図版 3 岡津横穴墳群の調査 その 3



A A群6号穴全景



B A群7号穴遺物出土状態



